

中部の

エネルギーを 築いた

人々

郷土に尽くし安曇電気を創立した
横沢 本衛

長野県北安曇郡は、1879(明治12)年に行政区画として発足した。現在、大町市を中心に池田町、白馬村、小谷村の1市1町2村から構成される。このうち現在の白馬村は、1956(昭和31)年に神城村と北城村が合併し誕生した。

横沢本衛は、1854(嘉永7)年、新潟県糸魚川市から長野県松本市を結ぶ塩の道の間地点にあたる北城村の塩島新田宿「庄屋丸八」で生まれた。明治維新を迎え、地元の開発を進める傍ら、郡会議員、県会議員、北城村長、衆議院議員などを歴任し、

- ① 塩島新田郵便取扱所新設(明治7年)
- ② 大町警察署北城分署の誘致(明治10年)
- ③ 北安銀行(明治28年)、小谷貯蓄銀行(明治33年)などの設立
- ④ 安曇電気㈱の設立(明治35年)
- ⑤ 大黒鉱山(=銅山)への経営参加(明治39年)
- ⑥ 信濃鉄道の四ツ谷駅(現：白馬駅)と森上駅(現：信濃森上駅)の開業(昭和7年)

など地域社会のために全力を尽くした。

安曇電気は、北アルプス燕岳から流れる中房川の電源開発、宮城第一、宮城第二、宮城第三、中房第四、中房第五の水力発電所を完工していった。1904(明治37)年に建設された宮城第一発電所は、当時ドイツのシーメンス・シュケルト日本事務所に在籍した野口遵(本企画2009年8月号掲載)が当たり、その時に設置されたシーメンス社製の発電機とフォイト社製の水車は、今日も現役に稼働している。

その宮城第一発電所は、日本で最初の電気炉製鋼法を発明した土橋長兵衛が興した松本の土橋電気製鋼所への供給や、1912(明治45)年に設立された信濃鉄道が1925(大正14)年に松本から信濃大町間を電化した時に穂高に変電所を造り供給するなど、地元の経済発展に大きく寄与した。

1 生い立ち

横沢本衛は、1854(嘉永7)年、長野県北安曇郡北城村で横沢本右工門、あいの長男に生まれた。生家は庄屋丸八で酒造業、麻問屋を営む財産家で農耕なども手広く行っていた。

少年時代から自ら進んで勉学に励み算術、国文学を長年勉強した。幼くして父を亡くし17歳の時より家業に専念した。そして、松本藩の庄屋として地域をまとめ、大阪、京都、名

古屋などに出向き麻を多く扱い商売を行った。

1874(明治7)年に郵便取扱所を誘致し、翌年、神城郵便局と北城郵便局を設置、1882(明治15)年から5年間北城郵便局長を務めた。その間には、1877(明治10)年に大町警察署北城分署の設置を請願し、その新築費用を献上したりした。

その後、郡会議員(1889年)、県会議員



横沢本衛

〔1854(嘉永7)年～1915(大正4)年
出典：白馬の歩み(白馬村誌第3巻)〕

(1891年)、郡会議長(1899年)、北城村長(1902年)に就任、長野県4区から衆議院議員に当選(1903年)するなどし、その間に地方の道路改修、信濃鉄道の信濃四谷、信濃森上までの誘致など道路交通問題に尽力した。

一方、1895(明治28)年、大町に北安銀行を創立し頭取に就任、1900(明治33)年、地元小谷貯蓄銀行を創立し頭取に就任、これらの銀行は1922(大正11)年に北信銀行となり、その後、現在の八十二銀行に継承され長野県の銀行発展の基礎を築いた。

1903(明治36)年、横沢は資本金15万円を募集し安曇電気を設立。本社を大町市に置き、北アルプス燕岳から流れる中房川に宮城第一発電所を建設した。

また、大黒鉱山の鉱山事業にも関係した。この鉱山は八方尾根を登り、唐松小屋から祖母谷温泉に2時間ほど下った富山県側にあり、餓鬼谷の左岸に小規模なダムと発電所を造り、坑口が掘られた。登山道の台地には事務所や精錬所(約80坪=幅4間、長さ20間、高さ3間)などもあり、50人ほどの坑夫が従事し、良質な銅800貫ほど(約3トン)の銅を製錬したが、1918(大正7)年に鉱脈が切れ鉱石難に陥ったため閉鎖された。

横沢本衛の略歴

西 暦	和 暦	履 歴 内 容
1854	嘉永7	横沢本右衛門の長男として長野県北安曇郡北条村に生まれる
1874	明治7	郵便取扱所を誘致し、翌年神城郵便局と北城郵便局を設置する
1877	明治10	大町警察署北城分署を設置
1889	明治22	郡会議員に当選
1891	明治24	県会議員に当選
1895	明治28	北安銀行を創設し頭取に就任
1899	明治32	郡会議長に就任
1900	明治33	小谷貯蓄銀行を創立し頭取に就任
1902	明治35	北城村長に就任
		安曇電気(株)を資本金15万円で設立
1903	明治36	長野県4区から衆議院議員に当選
		安曇電気が大町市の本社で創立総会を開催し横沢本衛が取締役社長に就任
1904	明治37	中房川の宮城第一発電所完成、
1906	明治39	大黒鉱山が発見され開発に携わり、明治45年に鉱業権を取得
1915	大正4	自宅にて死去



大正初期の大黒鉱山の坑口(出典:白馬村誌)

晩年、中風の病になった横沢は多くの名誉職を辞し、故郷の北城村に帰って1915(大正4)年に亡くなった。

横沢本衛については、1894(明治27)年に東京国文社から発行された「長野県の有名人」37名の一人として「君慈に懇切貧を恵み、窮を恤み力を公共事業に尽くすも一にして足らず、その郷党の名望を得るもの蓋し、偶然にあらざるなり、予聞く陰徳あるもの、必ず陽報ありと又聞く衆を得るものは助多しと予君が北城の小池に休んせず、他日必ず雨を呼び雲を興す、風来を役し、一躍して九天の上に登り実業社会に立ちて驚天同地の大事業をなすを疑わざるなり」と記されている。

横沢本衛の簡単な略歴は次の通りである。

2 横沢家住宅「庄屋丸八」と伝行山

旧横沢家住宅は、1854(嘉永7)年に木造2階建てで間口の広い切妻造りで建てられた。

2007(平成19)年に国などの補助金を活用し再生事業を進められ、現在、白馬村歴史的



古民家「庄屋まるはち」として地域の交流拠点の一つとして利用されている。屋敷には、建築時の建材が多く残り、家を支える大黒柱は土間と床との境にあり、

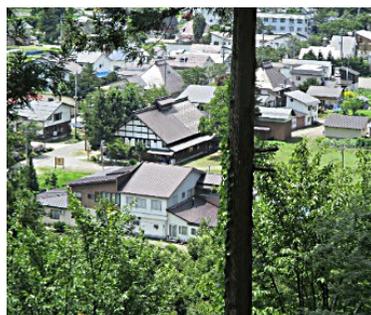
生家・現在の庄屋丸八内にある生誕地碑

けやきを使っており、木材の大半は地元の山から切り出した松材である。吊り天井、書院造りの床の間、ひのき一枚の欄間、玄関が3ヶ所あり、南西側の玄関は特別な来客用、南側の玄関は夏用、東側の玄関は白馬村は豪雪地帯のために屋根から落ちる雪で入り口をふさいでしまうため冬用として使用していた。

近くには伝行山(標高:



伝行山頂上にある稲荷神社



頂上から見た庄屋丸八



下堂にある庚申殿としだれ桜

730m)がある。本衛お気に入りの場所であった麓の下堂の秋葉神社、庚申殿、庚申塔(1694(元禄7)年の石造物)、徹然桜(=しだれ桜)などがあり、187段の階段を上ると頂上に稲荷神社がある。ここからは白馬三山、唐松、大黒、五竜、鹿島槍と続く北アルプスと眼下に四ヶ庄平が一望される。

3 安曇電気株式会社の設立と経営

安曇電気は、1901(明治34)年に横沢本衛はじめ南北安曇、東筑摩郡の有志19名の発起により計画され、翌年、資本金15万円で設立。1903(明治36年)に大町市の本社で創

立総会を開催し横沢が社長に就任した。そして中房川の宮城第一発電所の建設工事に着手、明治37年に完工し事業を開始した。同発電所の建設工事の経緯と尽力した人物とし

て、「東京シーメンスシュケルト日本会社の野口遵氏大いに奔走し同地方出身の工学博士青柳英司氏その他の賛助を得てその目的を達したりと、電気技術者は最初東京大学の太田国馨実習生として工事に従事し引続き主任技術者となり工事竣工後日露



宮城第一水力発電所の建屋と安曇野の電力発祥の地碑

役召集に応じ該工事には実習生として東京大学の永田興吉氏も多に尽力せりという実際シーメンスシュケルト会社の請負同様にて設計より工事に至るまで大小となく野口氏の手になれるものの如し…(中略) 同社有明山麓の発電所への機械運搬はずいぶん困難なりしがまず汽車にて明科駅までそれより高瀬川をのぼせ更にレールを敷き発電所まで運ぶ」と「電気の友(第201号)」(明治41年2月15日)に記述されている。

(2) 水力発電所の建設と経営状況

開業当時の安曇電気は、安曇地域に供給するには大きすぎる発電所と、わが国最高の電圧だった1万ボルトの送電線で5ヶ所の変電所(大町・池田・穂高・豊科・松本変電所)を経由して大町、池田、東穂高、豊科などの需要家に電気を送った。しかし、需要開拓に努力したが電灯収入は少なく、苦しい経営状態

が続き多額の欠損を生じた。このため、資本金を15万円から12万円に減じて損失を補填するなど経営刷新を断行した。横沢は、この責任を取るため1906(明治39)年12月に社長を引責退任した。このような経営にあって横沢の私財は安曇電気に注ぎ込まれたものと思われる。なお、故郷の北城村に電気がついたのは横沢本衛の没後2年後の1917(大正6)年であった。

その後、日露戦争、第一次世界大戦の勃発などにより、日本経済が動力を利用した近代的な生産方式に変わり、さらに、重化学部門の発展も見られ電力需要が伸びていき、山間地を含めた村落までも電気が普及していった。このため、安曇電気の営業状況は好調な時代を迎え、宮城第一発電所の増設に引続き5ヶ所の水力発電所を建設していった。

(寺澤 安正)

安曇電気の水力発電所の概要

発電所名	出力(kW)	有効落差(m)	水車(kW)	発電機(kVA)	運転開始
宮城第一発	400	50.65	①フォイトー260 ②日本工営ー280	①シーメンス社ー250 ②シーメンス社ー280	明治37.9
宮城第二発	470	49.39	日本工営ー500	日立ー500	大正7.6
宮城第三発	720	44.55	日立ー746	芝浦ー800	大正9.12
中房第四発	7,200	304.56	富士ー7,280	富士ー7,380	大正14.12
中房第五発	2,200	150.1	日本工営ー2,290	日本工営ー2,350	昭和2.6